

# 高まる農への関心

日本の農業は、農業従事者の減少・高齢化、農業生産費の減少など多くの課題に直面しています。しかし、このような課題を開き、農業を見直し、新しい農業の形を模索する動きがあちこちで見られます。

こうした農業に対する一般の人の関心も高く、この数年、ビジネスマン向けの経済誌やこれまで農業とは縁のなかった若者向けの雑誌で農業が特集されることが多くなりました。さらに、週末に農地を借りて野菜を作ったり、都会のビルの屋上やベランダで野菜作りを楽しんだりする人も増えています。



© Ohta Masayuki

## 農業を取り巻く状況

日本では1950年代半ばから工業化が急激に進み、農業人口は減少を続けています。また、農業従事者の高齢化が進み、後継者がいないために作物が作られていない農地が増えています。さらに、グローバル化に伴い安い農産物の輸入が増加し、国内の農業産出額も減少が続いています。そして、食料自給率は約40%と、諸外国に比べて圧倒的に低い状況が続いています。このように農業が弱体化した理由のひとつとして、農業政策を指摘する声があります。日本人の主食である米の国内生産を守るために、米の価格や生産量を管理したり、輸入米には高い関税を課したりしてきたことが結局、農業全体の競争力を奪ってしまったというものです。どのようにすることが本当に農業にとっていいのか今さまざまな議論がおきています。

### 農業はカッコいい!

これまで農業に対するイメージはあまりいいものではなく、6K(きつい、きたない、かっこ悪い、臭い、稼げない、結婚できない)といわれることもありました。しかし、そうしたイメージを

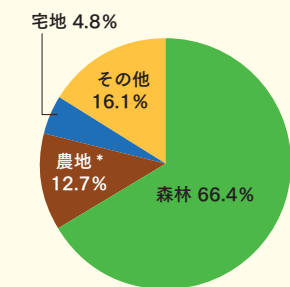
打ち砕こうと、長野県で農業を営む荻原昌真(おぎわらまさちか)氏は、雑誌『Agrizm』を2009年に創刊し、輝いている農家の人たちの素顔を紹介し、農業のすばらしさを伝えています。また、2009年に設立されたNPO農家のこせがれネットワークでは、農家の人たちをはじめ、都会で働く農家の息子が農業を継ぐことや新規就農者を応援するために、さまざまなセミナーやワークショップを開いています。このネットワークの代表理事である宮治勇輔(みやじゆうすけ)氏は6Kといわれる農業を新3K(かっこよくて、感動があって、稼げる)産業にすることを目標にしています。

### 新たに農業を始める人の増加

1999年に制定された新しい食料・農業・農村基本法においても、新たに就農しようとする者に対する支援がうたわれており、農林水産省が支援する就農準備校が設置されるなど、若者や非農家出身者の新規就農を支援する動きが活発になってきています。そしてこの数年、新たに農業を始める若い人が増えています。なかでも農家の出身でない人の就農が目立ちます。これは、農業に対するイメージが変わったこと、長年にわたる不況の影

## データで見る日本の農地

### 日本の農地



農地のうち半分が稲作

資料：国土交通省

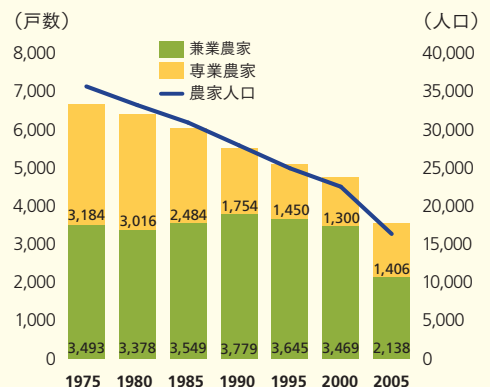
### 一戸当たりの農地面積の国際比較

	農家一戸当たりの農地面積
日本	1.8 ha
米国	180.2 ha
EU	16.9 ha
豪州	3,423.8 ha

資料：農林水産省「農業構造動態調査」(2006年)、米国農務省資料(2005年)、欧州委員会資料(2005年)、豪州農業資源経済局資料(2004年)

注：日本の数値は販売農家一戸当たりの経営耕地面積

### 農家戸数と人口



資料：「農業センサス」(農林水産省)

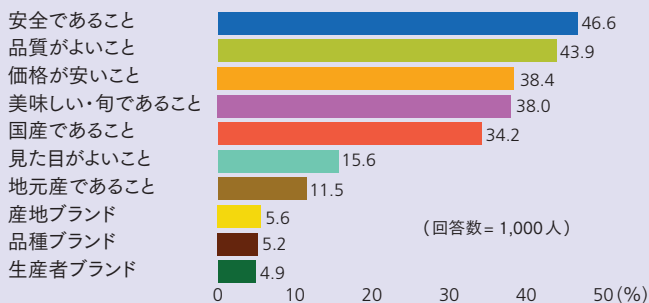
響で農業が選択肢の一つに入ってきたこと、そして何よりも規制緩和が進み農業生産法人が多く設立されたことによります。従来、農家の出身者でなければ農業に就くことは難しかったのですが、十分な資金や技術がなくても法人に雇用されることで就農しやすくなったのです。法人化することで、大規模化しやすくなり、多くの人手が確保できたりするなどの利点があります。さらに、農業に新しいビジネスの芽を見出し起業する人や農業分野に進出する企業も増えています。

## つながる農家と消費者



農家が作った野菜などが消費者に届くまでには、通常、農協や卸業者、店などが関わってきます。農家にとっては販路を自分で確保しなくていいという利点がある半面、仲介者が多いため利益が少ないことや、形の悪いものは出荷しにくく作物の廃棄につながるなどの欠点もあります。また、この方法では、消費者にとっても、収穫から販売までに日数がかかるため、新鮮な作物を入手しにくいということがあります。そこで最近注目を集めているのが農家から直接消費者に届ける方法です。この方法では、消費者は新鮮な野菜を食べられ、農家は利益をあげやすいという利点以上に、消費者と作り手がつながっていることで、作り手側は「あの人のためにおいしいものを提供しよう」と思い、食べる側は「あの人が作ってくれたものだから、感謝して食べよう」という気持ちの交流が生まれます。

### 野菜や果物を購入するときに非常に重視すること



資料：「次世代農業に関するアンケート調査」(2009年、野村総合研究所)

## マルシェ

マルシェ・ジャポンは、地方の生産者が流通を介さずに直接消費者に販売することができる市場(マルシェ)です。2009年秋、農林水産省の支援により全国8都市で始まりました。東京では、都心の六本木や赤坂、青山など7ヵ所で週に1、2回開催されています。六本木のヒルズマルシェには、毎回約30店舗が出店し、2,000～3,000人の人でにぎわっています。

マルシェでは生産者が自由に販売品目や数量、価格を決め、消費者と対話しながら「商品への思い」や「商品の魅力」を伝えながら販売することができます。そのため、生産者は消費者のニーズを知ることができ、消費者は生産者がわかる農作物を安心して買えるという利点があります。



たくさんの人でにぎわうヒルズマルシェ

©Mori Building Co., Ltd.

## マイ農家

「マイ農家」は、消費者が個人で農家と契約して定期的に野菜(主に有機野菜や無農薬野菜)を届けてもらうというシステムです。このシステムでは多くの場合、消費者が代金を前払いすることで、小規模農家でも経営が安定しやすくなります。また、定期購入してもらうことで、作物を無駄なく出荷できます。

## 地産地消



地産地消とは、その地域で収穫された農産物をその地域で消費することです。流通に要する時間やコストがかからないため、新鮮な農産物を安く買うことができる、その地域の郷土料理を継承できるといった利点があります。また、地元の農産物を消費することで、フードマイレージ\*を減らすことも期待されています。日本のフードマイレージの値は世界でも群を抜いて高く、国民一人あたりでも一位となっているため、フードマイレージを減らすことが求められています。

### \*フードマイレージとは

食料の重量にその輸送距離をかけあわせて求める数値のことです。つまり、食品の生産地と消費地が近ければフードマイレージは小さくなり、遠ければ大きくなります。食料を輸送する際には大量に二酸化炭素が排出されるため、フードマイレージは小さいほうが地球温暖化の防止につながると考えられています。



## 地元の直売所

地域の農産物を手軽に購入できる場所として直売所があります。もともと地方の国道沿いに設けた小屋などで、周辺の農家はその日採った野菜や果物などを並べて販売していました。15年ほど前から自治体や第三セクターが国道沿いに公共施設「道の駅」を開業し、地域産品の総合販売所として売られるようになり、注目を浴びるようになりました。

無人の小さな直売所もあれば、レストランを併設している直売所もあり、直売所の規模はさまざまですが、現在、全国で13,000軒を超え（2005年農林業センサス）、コンビニ最大手セブンイレブンの店舗数を上回るまでになっています。観光や農産物に関するイベントと連携して地域活性化につなげたりするなど、地方自治体も積極的に活用しています。



コインロッカーにいろいろな野菜が並ぶ直売所

## 学校給食

2006年に文部科学省が制定した食育推進基本計画では、地域の伝統的な食文化を継承すること、農業を活性化すること、食料自給率を向上させることなどを目的に、学校教育において地場産物を使用する割合を増やすことを目標の一つとして掲げています。地元で採れた農作物を給食で食べることで、地域の農業や伝統食に対する子どもたちの理解や共感を促すことができます。給食とあわせ、農作業体験や生産者との交流を実施しているところもあります。

## 都心で農業を楽しむ

安全な野菜に対する意識の高まりや、健康志向を反映した野菜ブーム、フードマイレージに対する関心などから、ベランダや屋上といった身近な場所で野菜作りをする人が増えています。安全、経済的、健康的、環境にやさしいなどの理由のほかに、自然と触れ合い、農作物を作ることでの充実感や達成感を味わえることも魅力の一つと捉えられているようです。花苗などを扱う会社のなかには、家庭菜園向けに野菜苗シリーズを展開するところも出てきました。国内では売られていない欧州のトマトを扱うなど、店では手に入りにくい野菜を作れるという家庭菜園ならではの長をアピールしています。

## ベランダ菜園

近年、ベランダで野菜を育てる人は珍しくありません。ミニ野菜、ベビー野菜は、収穫までの期間が短く栽培の失敗が少ないことから、ベランダで多く栽培される品種です。メーカーでは、手のひらサイズのチンゲン菜など、ミニ・ベビー野菜の品種改良に努めています。

また、初心者向けに種苗と鉢、土、肥料などを組み合わせたセット商品も売り出されています。書店で買える野菜栽培キットも登場しています。



本と種、土などがセットになっている

## 週末ファーマー

都市に住む中高年を中心に、農園の一角を借りて週末や仕事の合間に農業を楽しむいわゆる週末ファーマーが増えています。東京都内の区や市が運営する市民・区民農園も近年人気が高く、抽選になることも多いようです。初心者向けに栽培の指導してくれる指導員がいるレンタルファームは特に人気があります。

こういった期限つきで貸し出すレンタルファームを利用する人は200万人にのぼるといわれ、農業就業人口260万人に迫る勢いです。ブームに乗ろうと、都市の宅地や駐車場をレンタルファームに作り変える企業も登場しています。

たとえ週末だけであっても自ら農作物を育てることで、農業の喜びや厳しさを感じられる点が週末ファームの魅力のようです。

## 屋上農園

東京都では、2001年に自然保護条例が改正され、敷地面積1000㎡（公共施設250㎡）以上の建物の新築・増改築に屋上緑化が義務づけられたことから、屋上に農園や菜園などが見られるようになりました。

NPO大江戸野菜プロジェクトでは、都市で生活する人が農業を身近に感じることができる場を提供するため、東京都23区で屋上農園を使用して有機野菜を栽培しています。また、六本木ヒルズでも屋上で稲作を行い、子どもたちや一般の人たちが田植えや稲刈りを体験できる機会を提供しています。都市の農地は年々減少していますが、屋上を利用した農園は、屋上緑化と、身近な場所で農業を楽しみたいという人たちのニーズを満たすものと考えられます。



六本木ヒルズの屋上で田植えを体験

## 農業を教育に取り入れる



### 農業の甲子園

日本学校農業クラブ連盟には、農業高校や農業系学科の生徒約 90,000人が所属しています。その全国大会は、農業高校生の甲子園とも呼ばれ、農業を学ぶ高校生が、活動の成果を発表したり、知識や技術を競ったりする場となっています。61回目を迎える2010年には、341校、3,200人が出場しました。



©Future Farmers of Japan

農業甲子園の農業鑑定競技。鑑定技術を競う。

### 農業で元気になる子どもたち

約 8割の小学校、約 3割の中学校で農業体験学習が行われています。収穫の喜びがあることに加えて、子どもが自然や生きもの、食について関心・興味をもち、理解を深める機会となることから、小学校の教師の8割以上が農業体験学習の教育的効果を評価しています。なかには、農山漁村に1週間度滞在して農業の体験学習を行うセカンドスクール等を実施している小中学校もあります。

また、長野県須坂市では地元の生産者、老人会、地域団体等が協力し、農業小学校を開校しました。子どもたちの農業の厳しさや楽しさを体験させ、たくましい精神力、創造力を身につけ、食べ物への感謝の気持ちを育むことが目的です。子どもたちは毎月2回、土曜日の午前中に米や野菜などの植え付け、草取り、脱穀、収穫といった農作業を行い、年間を通した一連の農作業を経験します。また、地域の伝統行事や伝統文化、伝統食にも触れる授業も行っています。こうした体験を通して、世代を越えた地域の連帯感を養ったり、食べ物への感謝の気持ちを学んだりしています。

出典:

[http://www.maff.go.jp/j/wpaper/w\\_maff/h18\\_h/trend/1/t1\\_3\\_4\\_04.html](http://www.maff.go.jp/j/wpaper/w_maff/h18_h/trend/1/t1_3_4_04.html)

[http://www.maff.go.jp/j/wpaper/w\\_maff/h18\\_h/trend/1/t1\\_1\\_3\\_02.html#jc011](http://www.maff.go.jp/j/wpaper/w_maff/h18_h/trend/1/t1_1_3_02.html#jc011)

## ゲームで農業を体験



ネットや携帯電話などで農業を体験するゲームが人気を集めています。

### 町おこし農業ゲーム

SNS上の農業経営ゲーム「北海道ゆにふぁーむみんなで農場をプロデュース@由仁町」は、実際に存在する北海道夕張由仁町の風景や建物を再現しています。季節、気温、天気、時間、農薬、害虫ばかりでなく、農場試験場のデータ、実際の買付・販売価格などのデータを組み込み、農業のリアルさを意識した内容です。リアルさを追求しているため、通常のゲームのように、同じ時期に収穫できるはずのない野菜が収穫できるなどということはありません。そして、実際にゲーム内で育てた野菜をインターネットを通じて購入することもできます。由仁町は、ゲームを通じて町の農業をアピールしたいと考えています。

このほかに、携帯電話で利用できるモバイルゲーム「畑っぴ」には、農家の2代目、3代目を中心に構成される全国農業青年クラブ連絡協議会が協力しています。作物ごとに実際の農家が育成状況を監修しており、それぞれが顔の見える生産者としてゲーム内にキャラとして登場しています。



©LD Inc.

### サンシャイン牧場

中国発の SNS上のゲーム「サンシャイン牧場」の登録者数は500万人を超えています。種まきをして収穫をするというのが基本的なゲームの進行で、収穫した作物を売ることによって経験値とお金が得られレベルアップしていきます。SNS内の友だちの畑に出かけて、「水やり」や「虫の駆除」といったお世話をしたり、逆に「虫の投入」といったいたづらをしたり、作物を収穫したりすることができます。



# 若い力で 農業を盛り上げたい

私は、農家の7代目として農業を仕事にしています。ギャルメイクとおしゃれが大好きです。農業をやっている若い女の子はほとんどいません。そこで、インターネットを活用して、農業をしている全国の若い女性に呼びかけ、「農ing娘。」というグループをつかって、情報交換などを行っています。



## みかこ……22才、秋田県在住

小さい頃から、親の農作業を手伝っていましたが、跡を継ぐ気はまったくありませんでした。事務系の仕事に就きたいと思い、高校卒業後、専門学校へ入りました。でも、一日中室内にいるような仕事は合わないと気がつき、専門学校を辞めたいと思うようになりました。でも学校を辞めることに反対する両親とはけんかになり、ついに家出しました。すると両親はようやく退学を認めてくれました。家に戻ったものの、やりたいことが見つかりませんでした。何をしたいのか、何をすべきなのかかわからず、毎日ぶらぶらと時間を過ごしていました。

そんなとき、両親から農作業を手伝うように言われました。小さい頃は、種の仕分けといった細かく面倒な手作業をさせられていたので、農業はつまらないというイメージをずっともっていました。でも、初めてト



いろいろな機械もひとりで使いこなします。

ラクターを運転させてもらったり、以前はなかったような新しい機械を使わせてもらったりしました。そこで初めて「農業っておもしろい!」と感じ、「地味で単調、つまらない」という農業に対するイメージが消えました。機械を使う楽しさだけでなく、自分で一から育てた農作物を収穫したときの喜びも知りました。そこから次第に農業に‘ハマる’ようになりました。

そして今では、お米、ねぎ、玉ねぎ、とうもろこし、なす、トマト、枝豆、じゃがいも、かぼちゃ、チンゲン菜、アスパラガス、キャベツ、白菜などを作っています。

## 農業を通じて出会った人たち

本格的に農業を始めてみると、さまざまな人との出会いがありました。私はブログやツイッターで日々の様子を発信してい

ます。それらを通じて、農業をしている全国各地の若い女性と知り合えたことは私にとってとても大きな心の支えになっています。彼女たちとは「農ing娘。」というグループをつくり、主にブログやメールで、農業について情報交換したり、いろいろな悩みを相談したり、実際に会って親睦を深めたりしています。現在は20名ほどのメンバーがいます。農業従事者は高齢男性が多いため、今までは、気軽に話をしたり仕事の悩みを相談したりする相手がなくて、孤独を感じることもありました。インターネットを通じて同世代の女の子と同じ目線で共通の話ができることは本当に嬉しいです。そのほかにも、農家以外の人がたくさん応援してくれるようになりました。私のブログにメッセージを書いてくれたり、会いに来てくれたりする人もいます。とても励まされています。たくさんの人とのつながりや広がり、農業をやっていて一番よかったと思うことです。

## 農業ブームへの複雑な思い

この数年、「かっこいい」「心の癒し」といったイメージで農業がメディアでよく取り上げられるようになりました。派手でおしゃれな格好で週末などに農業体験をする東京の若いギャルが注目されたりもしています。農業のイメージが良くなって、多くの人が農業に興味をもつことはとてもいいことだと思います。

でも、最近のブームに乗って気軽に農業を始める都会の人は、「癒し」「会社で働くよりも農業のほうが人間関係が煩わしくない」



ネギの皮剥き。畑に出るだけではなく、このような細かく地味な作業がたくさんあります。

「簡単に気晴らしになる」「農業は農作物を育てるだけでいい」というイメージを農業に対してもっている人が多いような気がします。

でも、実際は全く違います。夏は灼熱のなかで作業をしなくてはなりません。体力的にとてもつらくて、「癒し」という甘いものではありません。週末の休みも、長い休みもありません。何時から何時までという定時で働くわけでもありません。農業は一人ではできないので、さまざまな人と関わらなくてはなりません。そのため、人間関係はととても大変です。農作物も作りっぱなしではなくて、利益がでる販売方法を考えなければなりません。気晴らしどころか精神的に追い詰められることもあります。

私の農場でも、ブームに影響を受け農業をしたいという人を数名、研修生として受け入れたことがあります。でも彼らは、イメージと実際の現場のギャップについていけず、「きつい」「休みがない」と文句ばかりを言って挫折しました。

このように、農業で生計を立てるということは、楽なものでも簡単なものでもありません。メディアが農業のイメージを良くして、そのことで多くの人が関心をもってくれることはいいことだと思います。だけど、私は日々真剣に悩みながら農業の厳しさと向きあっているので、農業は楽だからというイメージだけで農業を始める人を見ると、どうしても少し腹立たしい気持ちになります。

## 不安と闘いながら

もちろん、私だって、挫折しそうになったことはあります。農業を始めたときは、「女のくせに機械に乗るなんて」とブログで悪口を書かれたこともあります。



自分が育てた作物が実ったときは本当に嬉しいです。

また、空き缶を畑に投げ入れられたり、農作物を抜かれたりといった嫌がらせも受けました。農業を始めて4年ですが、大変なことがたくさんあって、何度も嫌になりました。それでも続けることができたのは「ここでやめたら負け」という強い気持ちをもっていたからです。そして、さまざまな人との出会いが支えになりました。

でも今は、その気持ちも少し揺らいできています。いまの日本では農業だけで生計を立てていくには不安なことがとても多いからです。例えば、若い人が不足しているため、高齢者が重労働をしなければなりません。高齢になって農業をやめても、後継者がいなくて作業をする人手も足りなくなると思います。そして安い農作物が海外から輸入されるので国内の農作物の価格

はあまり上がりません。災害で収穫がなくなれば収入もなくなります。多くの農家が利益も少なく不安定な生活を送っています。私自身、このまま何十年も続けていけるかどうか、毎日とても悩んでいます。

それでも、いまはできる限り農業を続けていきたいと思っています。農業を始めてさまざまな世代の人と出会うようになってから、日本の歴史について知る機会が増えました。そのなかで、昔の偉人のことばに興味をもつようになり、彼らのことばや生き方にとても励まされています。これからはもっと歴史を勉強して、私を含めいまの若い日本人に欠けているものを見つめ直し、不安と戦いながら強い気持ちで農業を続けていきたいと思っています。

みかさんのブログはこちら

<http://ameblo.jp/kodamanojo/>

## わたしの好きなもの

### 好きなこと

化粧すること。特にギャルメイクが好きです。

### 好きな野菜

玉ねぎ。食感が好きです。

### 将来の夢

農業を通じて友だちをたくさんつくること。

### 農業をやっていると楽しいと思うこと

色々な人に出会えること。

### 大好きな、歴史上の偉人のことば

世の人は 我を何ともいわば言え 我が成す事は 我のみぞ知る (世間の人からどのように批判をされようとも、自分が成し遂げたことは自分だけがわかっている、という意味。)



この記事は2010年12月に行ったインタビューをもとにTJFが構成しました。